

研究員の研究概要（平成元～2年度）

研 究 題 目	研 究 員
アジアにおける文化交流の研究 〈日中・日朝関係の研究〉（歴史研究班） 『令集解』所引の漢籍研究 近世対外関係史 対馬宗家文書による日朝関係の研究 難破唐船の記録の蒐集と研究 中国仏教典籍の伝播 中国本草学の伝播 来船清人の絵画	（幹事）藤 善 真 澄 奥 村 郁 三 長 谷 川 雅 樹 泉 澄 一 大 庭 脩 松 浦 章 藤 善 真 澄 宮 下 三 郎 山 岡 泰 造
〈中国語学教育の史的研究〉（言語研究班） 明治以前 初期～中期 後期 明治以降	（幹事）日 下 恒 夫 井 上 泰 山 日 下 恒 夫 尾 崎 實 鳥 井 克 之
東西文化交流の研究 〈文学・神秘主義の比較研究〉（比較研究班） 比較文学研究 近代文学論争譜 W. B. Yeats 研究 Julien Green 研究 Ezra Pound 研究 ロンドンの <i>The Ancren Riwle</i> 研究 アイルランド文学の研究 —Oliver Goldsmith— 神秘主義の研究 大乘起信論とインド大乘仏教 大乘起信論と西洋神秘主義 大乘起信論と禅仏教 大乘起信論とサンسكريット文学	（幹事）安 川 昱 谷 沢 永 一 名 取 栄 史 前 原 昌 仁 安 川 昱 和 田 葉 子 坂 本 武 D. イ ー ガ ン 丹 治 昭 義 川 崎 幸 夫 井 上 克 人 小 林 信 彦
〈東西文化交渉史の研究〉（文化交渉史研究班） 対外イメージの比較研究 孫文における西欧と日本 近代ヨーロッパの中国観 技術伝播の研究 水車の技術伝播とその定着過程について 染織技術の導入と定着過程 中国中・近世の技術書に見る建築材料の研究 イブン・ジュバイル「旅行記」の研究	（幹事）山 田 幸 一 河 田 悌 一 芝 井 敬 司 末 尾 至 行 角 山 幸 洋 山 田 幸 一 藤 本 勝 次 池 田 修

アジアにおける文化交流の研究

〈日中・日朝関係の研究〉(歴史研究班)

『令集解』所引漢籍の研究

奥村郁三・長谷川雅樹

『令集解』はいうまでもなく、我が国古代史・古代法の根本史料であるが、いくつかの理由から、この類稀な文献の価値が十分に評価されず、また活用されていないと思われる。その大きな原因の一つは現存の諸テキスト(諸鈔本を含めて)に多大の不安があることによる。そうしたことを含めて『令集解』研究の質の向上のための基本的研究として現在『令集解』所引漢籍の研究にとりかかっている。

『令集解』の中に引用された漢籍は伝写の途上で変形し、意味不明となっているものが多い。無傷な引用がほとんどない、といってもよい位である。かかる状態ではテキストを「読む」ことすらできない。そこでいくつかの方法を駆使して引用漢籍の姿をもとに戻さねばならない。現在の仕事は直接的にはこれに集中している。量はぼう大である。この仕事の途上では既に歴史上散逸し、日本にも中国にも現存しない書本の多くの逸文を摘出することができる。また漢語に付された音韻表示も出典をつきとめることによって当時の言葉や文章の研究に材料を提供できると考える。むろん漢籍の使われ方を通観すると、当時の中国文化受容の形態をより具体的な形で提示することができよう。現在の仕事は単純な漢籍原典のつきとめということではなしに、このことから『令集解』の持つ実に多様な価値を示すことに役立てようとするものであり、よりよいテキストを得るため突破口を開けようとするものである。

近世対外関係史

対馬宗家文書による日朝関係の研究

泉 澄一

『釜山窯の史的研究』(研究叢刊5, 昭和61年10月)出版後、対州(対馬)諸窯史の調査・研究を進めている。文化・文政期～幕末期の対州窯については「宗家文庫史料」の調査をもとに、昨年その成果(「文化・文政期の対州(対馬)窯をめぐる」(『東西学術研究所紀要』第23輯))を発表した。『釜山窯

の史的研究』では江戸時代初期～寛政期の対州窯にふれたが、釜山窯に付随しての調査に留まったため全体的な見通しを欠いている。したがって今年度は江戸時代初期から明治期までの対州窯について「宗家文庫史料」を中心に史料の再調査をつづけた。当初、本年度中に研究叢刊として成果をまとめる予定であったが「宗家文庫史料」の一部の公開が遅れたため来年度に延期し、目下「原稿の作成を進めている。

一方、長年にわたり継続して調査を進めている雨森芳洲関係の史料は対馬藩の「表書札方毎日記」を中心にして史料収集を行なった。なにぶん冊数も多いうえ一年間の記事が多く読み進めるだけでも大変だが、雨森芳洲の対馬藩官仕中の関係記事をなんらかの形にまとめておきたいと考えている。

難破唐船の記録の蒐集

大庭 脩

安永9年(1780)5月、房州千倉浦に漂着した沈敬瞻、方西園等乗組の南京船関係資料を集成する為、岩槻市や国立公文書館、東京大学史料編纂所等に出張してオリジナル資料の閲覧及びその写真版の収集に従い、かつそれ等の内日本の仮名書の部分は現代の文字に直して出版すべく原稿を整え、報告書として東西学術研究所資料集刊13-5を作成している。なお山岡研究員と共同で、方西園署名の絵画をも収載すべく、日本国内の外、米国所蔵品も集めている。

難破唐船の記録の蒐集

松浦 章

平成元年4月より同3年3月までの歴史班における個別研究成果は次の三点である。

本所紀要第23輯(平成2年3月刊)に発表した「清代大黃の販路について」は、清代の中国から世界に向けて輸出された重要な薬剤であった大黃が産出地の甘肅省や四川省からどのような販路を経て広州等の海外輸出港にもたらされたかを清代の檔案を中心に考察した。この結果中国国内の薬剤市場として漢口鎮(湖北省)、樟樹鎮(江西省)等の市鎮が薬剤の中継市場の役割を担っていたことを明らかにした。

平成2年6月20日の歴史班研究会例会で報告した「天保3年の唐風説書」は、天保3年(1832)に日本に伝えられた中国情報が、道光11年(1831)の末に湖南省南部の江華県で起った瑤(ヤオ)族の反乱であり、その内容が中国国内では伝えられていない内容を含んでいることを明らかにした。所報52号参照。

本所紀要第24輯(平成3年3月刊)に発表した「清末大東汽船会社の江南内河通航について」は、日清戦争後の下関条約によって日本の汽船会社が中国の内陸河川に航行する契機が与えられるが、その最初に上海を起点に蘇州や杭州、鎮江、淮河流域の清江浦へと定期汽船航路を拡張していった大東汽船会社の航運経営の様相を、中国の汽船会社との対峙関係を中心に考察したものである。大東汽船会社の状況は部分的には知られていたがその活動の全容を明らかにした。

中国仏教典籍の伝播

藤善 真澄

日中文化交流史の一環として、隋唐時代における仏教経典類の将来目録を中心に検討を加えている。就中、南山律の道宣により編纂撰述された諸書、『四分律刪繁補闕行事鈔』をはじめとする律典の数々や魏晉南北朝以来の仏儒道三教の交渉史に不可欠の史料たる『広弘明集』あるいは『集古今仏道論衡』、中国仏教史研究の根本史料となっている『統高僧伝』『集神州三宝感通録』また『釈迦方誌』、『関中創立戒壇図経』『祇園図経』などの祇園精舎と密接な関係を持つ撰述、さらには経典目録の『大唐内典録』に至るまで、わが国に与えた影響ははかり知れないものがあり、これらの輸入された時代や、流布状況を探りつつある。例えば『統高僧伝』の現存最古の版本たる興聖寺本については既に明らかにした通りであるが、その構成と他本との比較校合をもとにして、日本に将来されたのは開元時代、つまり玄宗によって齎された可能性が強いことなどである。

中国本草学の伝播

宮下 三郎

本草学の伝播については、すでに書籍に関して、

中尾万三・岡西為人・渡辺幸三・森鹿三など諸先輩の秀れた研究がある。ものやんによる伝播についての研究は不十分であるが、幸い本研究所には歴代研究員の蒐集された資料もある。そこで今回は代表的な漢薬である甘草をとりあげ、日本への伝播について追跡し、研究例会で報告した。ウラル甘草の日本への移植や、長崎貿易を通して輸入した甘草の量や価格について述べた。甘草以外の漢薬や、伝播に関係した人については、機会を得てべつに追求したい。

来舶清人の絵画

山岡 泰造

来舶画人は三つの系統に大別できる。その一は福建系で、最も古くから来舶し、隠元・木庵・即非をはじめとする黄檗僧の墨戯や、蔡簡・蔡輝(来舶かどうかは不確定)らの専門画家がいる。その画風は、洗煉されてはいないが、閩習といわれるあくの強い独特のものであり、江戸中期に画僧大鵬が出て、形成期の京・大坂の画壇に大きな影響を与えた。その二は、沈銓を主魁とする浙江系で、高乾・高鈞・鄭培・梁基らの沈銓画風の継承者たちが、主流のいわゆる南蘋派を形成し、狭義の長崎派は我国の画人であるこの派の画風を学ぶものの総称であり、江戸時代後半の画壇に最も大きな影響を与えた。浙江は、明の宮廷画風の主流を形成した画家たちを輩出したため、職業画家によって保持された花鳥画・人物画の伝統をもっており、その洗煉された画風は我国では最も理解され易かった。その三は、伊孚九・余崧・江稼圃らに代表される江蘇系で、蘇州を中心に発達した正統文人画を我国に伝えた。その影響は最も遅く、文化・文政頃になって漸つと本格的に受け入れられるようになった。二と三とを繋ぐ画家として、浙江出身の張崑・張華・費漢源と、安徽(江蘇ともいう)の方済があつて、前者は文人画化の道を取り、後者は着色画を主とする南蘋派に対して、浙江の水墨画の伝統を強調した。江戸絵画の本流、応舉一蕪村一呉春のいわゆる円山四條派は、これら三流をとり込んで成立したといえるが、中間派の張崑・張華・方済・費漢源は、当時の盛名の割には、今日みると影が薄いように思われる。

〈中国語学教育の史的研究〉(言語研究班)

明治以前

井上 泰山

言語班の今期二年間の研究テーマは、わが国における中国語教育の歴史をふり返り、時代毎の特徴を浮びあがらせることによって、日本と中国との交流史に新たな角度からの照射を試みることであった。私は、そのうちの明治以前を担当した。

鎖国政策をとっていた江戸時代において、中国語教育がどのように行なわれていたか、その実情を正確に把握することは容易でない。いつ頃、どこで、何を目的として、誰がそれを進めていたか、また、その際用いられた教材はどのようなものであったか、といった幾つかのポイントが解明されなければならない。幸いこの方面に関しては六角恒廣氏の幾つかの調査報告が備わっており、今期の私の研究もそれに負うところが大きかった。なかでも今回主な対象としたのは、用いられた教材の種類と様式とであったが、これについては、前期研究期間に行なった「水滸伝」を中心として、その施注語彙や施注態度についてさらに細かく検討した。また、これ以外にも、戯曲作品の若干について調査し、そのうちもっとも影響力の大きかったと思われる「西廂記」について、江戸時代における流入状況と利用状況を調べ、その成果の一部を、去る五月初旬、中国山西省永済県で開かれた、第1回西廂記国際学術討論会に於て口頭発表した。

〈中国語学教育の史的研究〉

明治初期～中期

日下 恒夫

前回記した「第1回国際老舎シンポジウム」は北京で開催の予定であったが「天安門事件」のため中止。そこで発表する予定だった「老舎の『四世同堂』は本当によみがえったか」を1990年度老舎研究会で口頭発表、近く『中文研究集刊』第3号に発表。また、それにも関連して“The Drum Singers”の英語版と重訳中国語版の対照をはほぼ完了。翻訳も開始。

今回のテーマと前回のテーマともに関係する資料

として明治以降の中国語教科書を中心とした資料7百余冊を研究所で一括購入。前回以降継続中の満州語に関しても、いくつかの重要な資料を図書館において購入していただいた。

また、近世から近代にかけての中国語に関しては、呉語が重要であるので、その方言の一つ上海語の学習と研究にとりかかっている。まだ研究レベルとはいえないが、「上海語の‘わたくしは’」を『言語』(vol. 19—no. 6)に書き、「上海語の外来語あるいは言葉遊びをめぐる」を近世語研究会(1990.5)で口頭発表。『上海市区方言誌』の語彙部分の索引を作成中。また、復旦大学からの交換研究員である范曉副教授および文学部研究員で蘇州大学の石汝傑講師の指導を受け拙著『中国語のすすめ』(光生館)のすべての中国語部分を上海語に翻訳しおわっている。これも将来の研究の基礎となればと思っている。

〈中国語学教育の史的研究〉

明治後期

尾崎 實

平成2年7月12日、「『官話指南』をめぐる——明治期日中文化交流史の一側面」と題して、口頭報告をした。

その内容は、1 テキスト、2 官話、3 漢口樂善堂、4 その他、にわたるが、要点は以下の2点である。その1は官話で、その2は漢口樂善堂。

その1。官話という名称は、明代から使用された。それは、方言と対立する、全国各地で通用することば、という意味で、とりわけ、役人ことばを指し、均質性のあるもの、と思われていた。

しかし、明治15(1882)年、わが国最初の北京語教科書、つまり、『官話指南』で、北京語といえば、北京方言のことだけでなく、北京官話も含まれるのだ、と指摘された。そして、この教科書は、日本人による中国語の方言研究の第一歩となっただけでなく、欧米の列強、とりわけ、フランスは、この教科書に、非常に強い関心を示した。

その2。第1次松方内閣、第3次伊藤内閣の外務大臣西徳二郎旧蔵の『会話指南』は、明治19(1886)年、参謀本部から漢口に派遣された荒尾精の対清方略に賛同し、岸田吟香の樂善堂漢口支店に集まった

人たちが、当時当地で中国語を学習した時の教科書で、それは、『官話指南』を、方言の漢口語に反訳したものであった、ということである。

〈中国語学教育の史的研究〉

明治以降

鳥井 克之

1989年度は前年度に翻訳して出版した『現代中国語における外来語研究』を基盤とした具体的な中国語の外来語の調査・研究を行い、同上書の著者達の編纂した『漢語外来詞詞典（中国語外来語辞典）』に収められた日本語を来源とする中国語の外来語について全面的に調査し、「中国語になった日本語」と題して研究例会で発表し、その要旨を「所報」に掲載して、これまでの研究テーマの総括を行った。それと相前後して、新しい研究テーマとなった「日本における中国語教育の歴史」に取り組み、9月に北京大学から派遣された研修員の王順洪氏と日本における中国語教育と中国における日本語教育について調査・研究を始めた。

1990年度はまず王氏との共同研究の成果を研究例会で「中日両国における外国語教育」と題して発表し、その要旨が「所報」に掲載された。その後、特に中国語文法教育の歴史について研究するために、これまでの文法理論研究の歴史を調査・研究する手掛かりとして、中国社会科学院語言文字応用研究所主任研究員の龍千炎氏の著書『中国語法学史稿』語文出版社・1990年（30万華字）の翻訳に取り掛かり、本年度末に翻訳を完了して、来年度に本研究所資料集刊として出版することになっている。なお原著者とは本年度8月に北京で親しく面談して、同書の翻訳・出版の同意を得ており、最近、原著者から長文の「日本語版の序言」が送られてきた。

東西文化交流の研究

〈文学・神秘主義の比較研究〉（比較研究班）

比較文学研究

W. B. Yeats 研究

名取 栄史

今回は私自身に関して言えば十分な研究活動をな

したとは言えないことに責任を痛感している。その理由は専ら『アメリカ演劇研究者会議』（法政大学黒川研究室に本部）の主要メンバーとしての学会活動に追われたことである。平成2年7月には本学飛鳥記念館を会場に2日間に亘って、年次大会が開催され、研究発表全部の司会者として、その前半年間、発表予定される劇作家・作品・テーマの研究準備に追われたことである。但しこれらは本研究所研究員としての私に与えられた総合及び分担課題とは直接関係はない。

偕て本題に話を戻すと、イェーツに勧められアイルランド独自の風習・生活・人々を劇化した J. M. シングの劇のケルト的要素の研究に従事し、2年間他大学の大学院での講義演習のテーマにシングを取り上げたことである。例えば、彼の劇『海に騎り行く人々』に於ける、肉親たちの突然の死も、神の救いであるとする家族や近隣の人々のキリスト教的宿命論に対して、ヒロイン、モーリヤの人間の悲劇的宿命の前には神ももはや無力であるとする言葉にアイルランド劇のケルト的要素を考えるのが私の説である。これらは講義以前から終了迄取ったノート類を基に、現在、再考検証しつつ、論文作成の途次であるのが実状である。可能ならば過去執筆のイェーツ論を加え、『イェーツ・シングの劇——アイルランド劇に見られるケルト性と神秘主義——』（仮題）として1冊に纏めたい。

Ezra Pound 研究

安川 昱

本年度は、Pound の西洋中世の文学と思想に対する強い関心について、(1) Pound 自身の西洋思想史の研究と、(2)それが Pound の詩や散文にどのように反映しているか、の両面から調査・研究を進めた。前年度に M. J. オーガスティン研究員が行う予定であった Marsilio Ficino 研究もこの研究計画の一環として受け継いだ。

平成元年（1989年）秋には Ezra Pound 研究の先達二人を本学に招聘し、研究交流を行ったことは特筆すべき出来事であろう。

その一人は、メイン州立大学オロノ校名誉教授の Dr. Carroll F. Terrell である。1948年以来メイン

州立大学の教壇に立ち、英米文学・比較文学を講じてきた博士は、国際エズラ・パウンド協会を創設し、自ら会長に就任して、継続的に国際学会を開催するとともに、季刊誌 *PAIDEUMN* を刊行して、世界中のパウンド学者の交流や連絡の調整者の役割を演じ、若い研究者に発表の機会を与え、援助の手を差し伸べてきたのであった。

第11回日本エズラ・パウンド協会全国大会に出席のため、日本エズラ・パウンド協会の招きで来日されたのを好機に本研究所に招聘し、特別講演をお願いした Terrell 博士の“Pound VS. Reductionist Orthodoxies”と題する講演（『紀要』第23輯、『所報』第51号参照）の内容は、私の本年度の研究計画に対しても示唆に富むものであった。

もう一人の先達はプリンストン大学のEarl Miner 博士である。博士はすでに本研究所の馴染みであるが、今度は、平成元年（1989年）11月13日から15日まで開催された関西大学100周年記念会館落成記念国際シンポジウムの講師として本学の招きで夫人を伴って来日されたのである。Miner 博士は、初日の鼎談「世界の中の日本人」に、司馬遼太郎氏、谷澤永一教授と共に出演された。

この外にも、日本現代英米詩協会の招聘により来日した著名な米国の詩人 John Ashbery 氏を〈比較班〉有志が本研究所に招き、平成元年（1989年）5月23日、懇談会と朗読会を開催した。John Ashbery 氏にも Ezra Pound の影響は大きい。

ロンドンの*The Ancrene Riwele* 研究

和田 葉子

1989年度前期は *Ancrene Riwele* の訳注の仕事を進めたが、後半からは一年間英国 Cambridge, Oxford, 及び British Library において写本の調査をした。特に、Cambridge, Corpus Christi College の Parker Library には原作者の最終校の精密な写しであろうと言われている *Ancrene Riwele* の定本があり、テキスト編纂のため筆写に通い、Parts 4 と5を写し終えた。マイクロフィルムでは分かりにくい箇所は勿論のこと、テキストの年代決定や写本の歴史を知る上でも実物に触れて調査することは、不可欠である。

また、Magdalene College には Samuel Pepys の蔵書を取めた Pepys Library があり、ここには1380年頃書かれた *Ancrene Riwele* が所蔵されており、校訂のためこの図書館にもしばしば出かけた。Gonville and Caius College にも Anglo-Norman を母語とする写字生が書いたと思われる *Ancrene Riwele* の写本が残っており、これもまた、興味ある資料を提供してくれた。

1990年9月には University of York で開かれた Mediaeval Women をテーマにする国際学会に参加し、*Ancrene Riwele* の専門家である University of Southampton の Dr Bella Millett や University of Liverpool の Jocely Wogan-Browne らと意見の交換をした。コンピューターによる研究が進んでいるので、お互いに、異なるテキストのファイルを移し合ったりもしている。

帰国後は研究例会で『*The Ancrene Riwele* に見られる写本の流布と知識の伝播』について発表した。

アイルランド文学の研究

— Oliver Goldsmith —

坂本 武

Oliver Goldsmith の代表作 *The Vicar of Wakefield* について今なお解決されていないように思われる問題は、この作品が「ロマンス」物語に特有の「センチメンタリズム」‘sentimentalism’ と「もっともらしきの欠如」という二つの特質を明らかに示しているにもかかわらず、作者自らは「ロマンス」物語というジャンルの痛烈な批判者であったという、その矛盾点をどのように説明できるかというものである。

ところで焦点を ‘sentimentalism’ という思潮に絞って考えてみると、この問題への手がかりが掴めるように思われる。というのも Goldsmith の他の書き物においては ‘sentimentalism’ に反対する姿勢がうかがわれるからである。*The Vicar of Wakefield* において Goldsmith の ‘sentimentalism’ が肯定的価値を持つものとされていることは疑いないことであるとすれば、われわれはここで Goldsmith の「反・センチメンタリズム」‘anti-sentimentalism’ の方に注目しなくてはならない。

この研究においては、そうした「反・センチメンタリズム」を示す資料を Goldsmith の他の著作物から選び出し、肯定的 ‘sentimentalism’ の例とともに編纂して、Goldsmith の ‘sentimentalism’ の全体的展望を可能とするような、1冊の選集 “A Goldsmith Selection” を公刊することを、その最終的な目的とした。

神秘主義の研究

大乘起信論の研究

丹治昭義・小林信彦

悉有佛性という根本命題を体系的に展開した思想を佛性論とか如来藏論と呼ぶが、『大乘起信論』はその思想を説く論書である。この論書にはサンスクリット本もチベット訳本もないが、漢訳が二種類あることもあって、果してインドで著述されたものなのか、実際には中国で著述されたのか、近代的な佛教学研究が始まって以来、多くの学者によってそれぞれの立場から議論されてきた。それはこの論書が比較的短いものでありながら、内容的には密度が濃く、インドの佛性論関係の論書とも深い内的関連を保ちつつも、独自の展開を示し、それが中国、日本の佛教に非常に大きな影響を及ぼしてきた重要な論書だからである。

神秘主義研究班では、この論書を思想的・歴史的に総合的に解明することを目指している。そのため平成元年度には2回合宿を行ない、午後1時から晩11時まで、翌日は朝9時から午後4時過ぎまでに及ぶ、かなりハードな研究会を行ったほか、午後1時から5時までの読書会を数回開催した。これらの研究会や読書会には研究員のほかに、中文の吾妻先生や哲学の山本先生、大学院生の大西君にも参加して頂いた。この1年間の研究活動によって、『起信論』に関する共通の基本的理解が得られたので、平成2年度はそれに基づいて、各研究員の個別的な研究発表とその討論を行った。

研究員のテーマは各自の報告に記された通りであるが、吾妻先生には中国哲学との思想史的交流、山本先生には現代西洋哲学、特にハイデッカーの哲学との比較研究をお願いした。大西君はアビダルマの法の理論との比較研究を行なった。

小林は『起信論』の日本密教への影響を主に研究し、『起信論』の註釈書、『釈摩訶衍論』が真言宗の思想に重大な影響を及ぼしたことを解明した。本研究所紀要23号に発表した「世界仏教史の立場から見た正統空海伝の成立過程」はその成果の一端である。

丹治はインドの如来藏、佛性論との比較研究を課題とする。平成元年度には『宝性論』と、2年度には『楞伽経』を加えて比較検討した。その研究の一部を『実在と認識』（研究叢刊、平成3年度）の第2章に加えることにしている。

大乘起信論と西洋神秘主義

川崎 幸夫

私に課せられた研究のテーマは、主として否定神学 (theologia negativa) の系統に属する西洋の思辨的神秘主義と対比することをとほして、『大乘起信論』の根本思想を明かにするところにある。いふまでもなく『大乘起信論』は中国佛教において華嚴、禪、浄土など諸宗の要となる位置を占め、日本佛教の各宗派にとつても大乘佛教の根本思想を把握する據所となつた重要な論書であるから、さまざまな角度からのアプローチが可能である。以上のことを念頭に置いた上で、この兩年度においては眞諦譯と實叉難陀譯の二種のテキストを読み較べることによって、心と法、眞如と縁起、空と不空、始覺と本覺、念・相・識といった『大乘起信論』における基本概念を、テキストの文脈に照らして把握することに努め、さらに『傳心法要』など唐代の禪宗テキストとの關聯を探つた。

大乘起信論と禪仏教

井上 克人

鎌倉新仏教は天台本覚思想のさまざまなヴァリエーションであると言える。道元の場合も、当初は本覚思想に大きな疑問を抱きながらも、入唐後天童如浄の下で体得した「本証妙修・修証一等」の立場には本覚の思想が窺われる。しかし道元の思想の由来が直ちに天台の本覚法門にありとする断言は安易で性急にすぎる。そもそも本覚の思想は大乘仏教全般に一貫する哲理であって、やはり「本覚」という言

葉の初出である『大乘起信論』にまで遡り、しかも単に初出であるとして紹介、挙示するにとどまらず、その如来藏思想がもつ論理の哲学的究明が必要であろう。

当研究班では、これまで三度の合宿共同研究により、『大乘起信論』の徹底した解説を行ってきた。その研究成果を踏まえ、『哲学』第14号（平成2年1月、関西大学哲学会発行）に『〈時〉と〈鏡〉』と題し、道元、荷沢神会、圭峯宗密、洞山良价を論じてみた。これは先に発表した『修と証のあいだ——道元の疑団をめぐって——』（『南都佛教』第58号、昭和62年6月発行）の続篇といえる論稿である。また平成2年10月31日の究研例会で『「大乘起信論」と初期禅宗の立場』と題し発表。道信、弘忍、神秀等の東山法門と、「見性」を旨とする慧能、神会、宗密の禅との対比を試み、起信論の立場の深まりを跡付けてみた。（詳細は所報第53号参看されたし。）

〈東西文化交渉史の研究〉（文化交渉史研究班）

対外イメージの比較研究

孫文における西欧と日本

河田 梯一

20世紀末の大きく変わる時代のなかで、中国の近代化は可能なのであろうか。またそこで、中国の伝統はいかなる作用を果たすのだろうか。

このような問題意識のもとで、私は孫文という人物を主題にして、中国の伝統と近代化について考えてきた。その作業の一つとして、まず第1次世界大戦に発展途上の中国が参戦すべきか否か——を論じた孫文の重要な論文「中国存亡問題」を翻訳し、孫文の西欧観、日本観、そして伝統と近代についての意識をさぐった。と同時に、60年にわたる孫文（1866～1925）の波瀾にとんだ生涯を追跡する「孫文年譜」を作成。いずれも社会思想社から刊行された『孫文選集』第3巻に収録した。

また、中国・伝統・近代化をテーマに、孫文とともに中国の近現代史で重要な位置をしめる梁漱溟と毛沢東に関する論考を執筆、『講座現代中国・第4巻——歴史と近代化』（岩波書店）に「伝統から近代への模索——梁漱溟と毛沢東」と題して発表した。なおその論文の要旨については、1989年12月20日の

「研究例会」で報告をおこない、研究所員の方々から貴重な助言をえた（『東西学術研究所々報』第51号参照）。

近代ヨーロッパの中国観

芝井 敬司

研究計画においては、18世紀の啓蒙思想家の外部世界認識の諸特徴を明らかにする目的で、まず全体像についての概略を調査し、その後、特定の個人としてモンテスキューの外部世界認識の特徴を明らかにする予定であった。しかし、モンテスキューについては、すでに中国観とペルシア観を中心にいくつかの研究成果が公けにされているので、『ローマ帝国衰亡史』で著名なエドワード・ギボンに焦点を当てて、ギボンの外部世界認識の特徴を究明することにした。

そこで、平成元年度には、当初の計画通りに、18世紀ヨーロッパの外部世界認識の特徴を特定する作業に取り組んだ。そこから得られた知見は、大略次のようなものである。①17世紀以来の古代派—近代派論争は、この世紀半ば頃までに、近代派の勝利におわったこと。②諸民族や諸社会の分析としては、この世紀を通じて、モンテスキューの風土論の影響が根強いこと。③しかし、世紀後半以降、スコットランド啓蒙思想家たちを中心に狩猟、牧畜、農耕、商業の4段階の社会発展を想定する理論が生まれ、ヨーロッパ文明の優位を確信する傾向を強めたこと。

平成2年度にはいって、先述のようにギボンの『衰亡史』における外部世界認識の問題に着手し、文献の収集と研究史の整理を始め、近年の研究動向において注目されている「ギボンの文明と野蛮」の問題について分析を進めた。この成果については、12月例会において研究発表を行い、本紀要には、今後の研究の手がかりとすべく、研究報告を論考の形で提示した。

技術伝播の研究

水車の技術伝播とその定着過程について

末尾 至行

『徴発物件一覧表』は、明治時代中期の水車事情を今に伝える貴重な統計書であるが、その明治24年

版は、明治22年の市制町村制施行直前の旧集落ごとの数値を載せている点でとりわけ地理学的評価に値する。この数値を分析した結果によれば、極度に水車が集積していた集落が全国で約170カ所認められるが、今期はそのうちの岩手県北九戸郡軽米村長倉、宮城県刈田郡白石町、兵庫県八郡郡湊村鳥原村などの実地調査を行い、これらの水車集落の中で水車が果たしていた役割を究明した。

また、明治時代以降、地方庁が関与して保存している「水車設置願出文書類」の閲覧・分析作業も、今期は岩手県庁および宮城県立図書館において実施し、水車の立地・機能に関する興味深い資料を採集した。

他方、前期中（昭和63年夏季）に実施した文部省科学研究費「海外学術研究」によるハンガリー・トルコでの水車調査の結果も、今期中に引き続いて整理した。

なお、今期中には、平成元年12月研究例会において「製粉技術の連続と非連続——欧亜回廊地帯における——」と題して研究発表をしたほか、外部でも次のような機会に以下のテーマで研究成果を口頭発表した。

「伝統的製粉手段の諸型式とその分布——主として西南アジア・東南ヨーロッパを対象に——」平成元年11月、人文地理学会大会、於奈良大学。

「動力革命の地域的展開——石川県の場合——」平成2年5月、歴史地理学会大会、於金沢大学。

「水車動力の地理学的評価——国内・海外の実地調査に基づく——」平成2年12月、兵庫地理学協会特別例会、於神戸外国語大学。

染織技術の導入と定着過程

——コチニールの飼養——

角山 幸洋

このコチニールとは、ウチワ・サボテンに寄生するメキシコ原産の昆虫である。現地メキシコにおいては、栽培はされていないが、ペルーでは、いまだに栽培されていて外貨獲得に役立っている。染料・塗料・薬品の三種類の効果があり、19世紀まで、盛んに栽培がされてきた。このほかには紫鉞があり、この昆虫が古く東洋で栽培され、わが国へも伝来し、正倉院には薬品として保存されている。

その後、新大陸の発見により、旧大陸に伝えられ、いままでの紫鉞に代わり、取り入れられ同種類の紫鉞とは競合関係をもつにいたった。新大陸からのコチニールが大量に旧大陸へ輸入せられ、またこれで染織された猩々緋が、武将の陣羽織・火事装束として服飾につかわれた。これらは羊毛に対しての染着性が良いので染料として盛んにつかわれた。このようなことからオランダからの導入となるが、羊と羊毛技術者・コチニールと技術者の招聘となるのであるが、オランダの貿易を妨げるものとして排斥し、これを拒否することになる。

明治12年には、熱帯植物の導入の一貫として、コチニール（その他、コーヒ・キニネ・タバコなど）を小笠原島に移植することになるが、これも失敗に期することになる。

なお本稿は「染織技術の導入と定着過程」の課題で研究をすすめてきたものであるが、「コチニールの飼養」と題して、『紀要23輯』に掲載している。

中国中・近世の技術書に見る建築材料の研究

山田 幸一

中国の技術史書『营造法式』（その中の壁仕様については本研究所紀要第9輯で考察した）には磚（今日の煉瓦、またはタイルに相当する建築材料）に関し、その寸法形状や組積法を詳細に規定している。単に壁体を築造するだけでなく、アーチ（拱）の構築法も示し、その技術水準は組積式構造の本場である同時代のヨーロッパや中近東のそれに比しても見劣りしないくらいである。また対象を建築物のみに限定せず、橋梁・水路あるいは城壁等、土木的構築物にも及んでいる。『法式』は李朝朝鮮にも将来され、建設工事の規範の一つとして尊重されていた。中国はもとより朝鮮半島でも参考とされた文献であれば、当時のわが国でも知悉されていたと考えるのが自然であろう。ところがわが国での煉瓦の製造と使用は明治開国期を待たなければならぬ。もっとも「磚」は飛鳥・奈良時代、仏像等をレリーフした壁用タイルまたは床用タイルとして、そして官庁・寺院建築物の基壇には今日の煉瓦と同様の使い方をしていた。しかしこれを建築物本体に使用した例は、江戸時代末まで文献・遺構ともに知られていない。

そして開国期から始まった煉瓦造建築も関東大震災以降は事実上建てられなくなった。煉瓦造は耐震的に造ることと窓を大きくすることは相矛盾する命題であって、わが国の風土に不適當と判定されたからである。『法式』を通じて、または中国や朝鮮半島で実際に建てられていた煉瓦造建築を知っていながら敢えてこれを採用しなかったのは、その矛盾をわが国の当時の技術者が心得ていたからではなかったかと推定される。

イブン・ジュバイル『旅行記』の研究

藤本 勝次・池田 修

イブン・ジュバイルは、12世紀後半のアンダルス生まれのムスリム旅行家で、その旅行記は美文体のアラビア語で書かれていることで有名で、アラビア語学のうえからも研究に値する文献である。また十字軍時代のイスラム世界の社会状態を知るうえでも欠かせない貴重な史料である。特にメッカの記述は詳細で、多くの文献に引用されている。この数年の間、定期的に輪読会を続けてきたが、在阪のアラビア語研究家の任意の参加も得て、この度、本文の翻訳をいよいよ完了し、目下訳語の調整及び統一の作業に入っている。今後、地名や人名に関する注の作成を行い、出版の準備段階に移ろうと考えている。